

2020年4月28日(火)

老球の細道538号

日本バスケットボールのルール変遷史②

会津バスケットボール協会 室井 富仁

オーストラリアの子どもが「コロナ」という名前でいじめを受けたとか、静岡では県外ナンバーの車が傷つけられたとか寂しいニュースが後を絶たない。私は以前「コロナ」という車に乗っていたので、今だったら車を傷つけられたり、誹謗中傷されたりしていじめられたかもしれない。まったく情けないことだが、ここはがまんして前号の続きと行きたい。

2・ファールに対する罰と償いについて

新型コロナに対しては「三蜜」が反則行為としてあげられているが、バスケットボールの場合は「密着」つまり激しい接触によって起こるファールに対しては、プレイヤーの安全保障のためにも適正な罰を与えると共に、ファールされたプレイヤー並びにチームに対して、その償いを講じている。主に3点に絞って述べられている。

① フェアでないプレイに対して

従来は「罰としてフリースローを与える」考え方であったが、テクニカルファール、インテンショナルファールという考え方ができて、2フリースローを与えることになった。

② フェアであるが、ファールが起ってしまった場合の償いについて

シュートの時のファールは、従来シュートが入ったら1フリースロー、入らなかったら2フリースローであったが、カウントワンスローは一時期なくなり、近年また復活した。

2フリースローの方は1977年(昭和52年)より「スリー・フォー(for)・ツー」ルールができた。1投目か2投目を失敗すると、もう一投打つことができた。

③ 償いをしてもなお多いファールについて

一人のプレイヤーが4回のファールをすると退場であったのが、5回のファールで退場になった。ゲーム自体がだんだん激しくなってきたことに対応したものであったという。その後、力の平均したプレイヤーを多く有しているチームが平気でファールをするようになったので、1977年「チームファール」が制定された。各ハーフごとに10個を超えるとフリースローを与えられないファールにもフリースローが2本与えられるようになった。

3・ストーリング対策について

バスケットボールの魅力はスピードである。それなのに得点をリードしているチームが勝つために攻撃しないでボールをキープするという作戦は、その魅力を貶めることになる。

1933年(昭和33年)「10秒ルール」ができた。コートを二分して、ボールを保持したチームは10秒以内にボールをフロントコートに進めなければならない。ところが、フロントコートだけでもストーリングができたので、1960年(昭和35年)、ボールを保持したチームは30秒以内にシュートをしなければならない「30秒ルール」ができた。これによってバック、フロント両コートでストーリングができなくなり効果があった。〈続〉